

金田一春彦

話し言葉の技術



金田一春彦（きんだいち はるひこ）

1913年東京生まれ。東京大学文学部国文科卒。

専攻は国語学。現在、上智大学外国語学部教

授。主著は『日本語音韻の研究』『日本人の

言語表現』『日本語』『ことばの四季』『明解

国語辞典』など。

話し言葉の技術

金田一春彦

昭和52年3月10日 第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 廣済堂印刷株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Haruhiko Kindaichi 1977

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

話し言葉の技術

金田一春彦

講談社学術文庫

序

終戦後まもなくの初冬のこと、都市では、焼け跡にバラックが立ちはじめたころのことである。秋山雪雄君がNHKのアナウンサー養成所の講師に推薦してくれた。何でも日本語の話をすればそれでいいという。そんなことならと気軽に引き受けて、第一日目、音素とは、音節とは、……というようなことをしゃべっていると、未来の志村二世や小藤倉といった連中、みんなおとなしく聞いている。いい気持で二時間ばかりしゃべり、意気揚々教室を出ようとする、二三人、呼びかけて「先生、質問があります」という。「何だ」と聞くと、ひとり、「私は、街頭録音の番組を担当したいと思うんだが、どうしたら相手が気楽に話してくれるか、その技術を知りたい」という。もうひとりは、「私はニュースの原稿をよく読まされるが、おまえの読みかたはさっぱり要領を得ないと言われる。どこに欠陥があるのだろうか」というのであった。

3 序

私は当惑した。そんなことは考えてみたこともない。それにきょうの話とは関係ないじゃないか。——しかしわからないというのは、講師の沽券こけんにもかかわると思つて、適当にお茶を濁して答えておくと、さすがに応対なれた人たちで、「わかりました」とすぐ去つて行つてくれた——が、その顔には失望の色がちらつとうかがわれた。私は、放送局の建物を出ながら考えた。——私は、コトバの研究に従っているものである。そして、今の両君の質問は、

コトバに関係した問題で、しかも真剣に解決を迫られている問題である。それを私が解答を与えられないとは何事であるか。――私は、曇った、うすら寒い空をながめながら、苦いあとあじをもてあましていた。と、横合いから大きな声でオイと呼ぶ人がある。振向けば、復員服のようなものを着た平井昌夫さんだった。

平井さんは、文部省に招かれて、ローマ字問題で何か議論を戦わしてきたところだという。私は、平井さんとはまだ二三回公けの席で顔を合わせただけの間柄だった。が、いかにもあけっぱなしの人がらである。連れ立って歩きながら、私は最前の体験を語り、困ったという話をした。すると、平井さんは、立ちどまり、「そんなことは何でもないじゃないか」と言つて、あの質問の模範解答を滔々^{たうたう}としゃべり出した。私はそれを聞いて驚いた。私にとって、すべて納得のいく内容であつた。全体はきわめて合理的・組織的であり、しかも明快であつた。そのことばの、一言一句は、何と新鮮に、何と力強く、私の耳へ響いたことか。私は驚いた。私は私のとじこもっている世界の外に、今まで夢想だになかった世界があること、そしてそれは実にあかるい活気と希望に満ちた世界であることに気がついた。

実は、私は、数年来、時枝博士に親しくしていた。博士は、常に、今までの「橋本国語学」だけではだめだ、もっと我々の日常の言語生活にとって大切な研究問題がある。国語学者はそれと取り組まなければだめだ、ということをくり返し説いておられた。が、「橋本国語学」一辺倒の私は、それに耳を傾けようともしていなかった。が、今にして、時枝博

士の説いておられたことはこれだったと想到した。——私は夢中になって、平井さんに、一体そういうことはどんな本を読めば勉強できるのか、とたずねた。平井さんは、たちどころに、アメリカの本らしいものを、ぺらぺらつと四つ五つあげた。それらはいずれも私にとつてはじめて聞く名前であった。

私は、ちようど通りかかったレストランに、食事をとろうと平井さんを誘い入れた。食事をとるといっても、そのころのことで、お茶をもらって、手弁当を食べるのである。私は、この人から少しでもよけいに、こういう方面の知識を学びとりたかった。が、平井さんには、私の失敗よりも、文部省で行われたローマ字委員会の討論の方が大きな関心事だったらしい。委員の中にけしからぬ態度のものいることを烈しい調子で論じはじめた。私は、その話の腰を折りかねた。で、適当なあいづちを打ちながら、平井さんがいかにも塩のきいていそうなタラノコと、これはさらに辛そうな真赤なベニショウガをかんでは、麦のまじった弁当をかっこむ姿を眺めていた。そうして、そのたくましい気魄に私もあやかろうと心をはげました。

平井さんは、午後は桜田小学校で、国語教育の講演をするとかいって、忙しそうだった。折から、外では冷い雨が降りはじめていた。が、平井さんは傘もささずに、肩をいからして電車を向こうへ渡って行った。私はその後姿を見送りながら、今後自分がどのような勉強をすべきか計画をめぐらした。……

ここに私が書いた「言語技術」の問題、それに志したのは、実にこの日のことだった。その後、平井さんとは、国立国語研究所で机を並べてつとめる身になり、いろいろ教えを受けることができた。今度、平井さんのお勧めでこのようなものをまとめるめぐり合せになったことには、往時を思い起こしちよつとした感慨がある。一言ここにしるして、学恩と好意に報いる次第である。

昭和三十年十月十七日

著

者

学術文庫版の序

「話し言葉の技術」がこのたび講談社学術文庫の一冊として復刊されるとは嬉しいことである。この本は、昭和三十一年に名古屋の光風出版という本屋さんから出ていたものであるが、十年ばかり前に出版もとがつぶれて、絶版になっていたものだった。二十年も前のもので、例など取換えなければと思うものもあるが、手をつけると切りがないので、今は誤植の訂正と、用字の統一ぐらいにしぼり、あとはもとのままにした。御諒承を乞う。

この本は、前の序文にも書いたとおり、平井昌夫さんのお勧めにより、また平井さんから

多くのことを教わりながら書いたものだった。今度、新たに解説の文章を書いていただき、大変恐縮している。平井さんは私を春ちゃんと呼んでくださる、数少ない先輩の一人である。さん付けで呼ばれるのは、少々くすぐったく、また中にはこのあたりはどうも思うところもあるけれど、今は御好意をそのまま有難く頂戴しておく。

前の本を書く時には、そのころ何かと助けてもらっていた芳賀綏君に、材料の蒐集、整理、文章の作成のすべてに亙って何かとお世話になった。また、石黒修・藤原あき子・大久保忠利・高橋圭三の諸氏からは推称の言葉をいただいた。改めて御礼申し上げます。

今度の本では全面的に講談社の近藤楨之さん、長野脩君の御厄介になった。これも有難く感謝申し上げます。

昭和五十一年十一月二十三日

金田一春彦

目次

序	3
---	---

学術文庫版の序	6
---------	---

総論

第一章 言語技術とは？	14
-------------	----

第一節 きまりと技術	14
------------	----

第二節 言語記号—そのきまり	18
----------------	----

第三節 言語行動—その技術	26
---------------	----

第四節 言語技術の種類	33
-------------	----

第二章 言語技術の目標	36
-------------	----

第一節 言語行動の効果	36
-------------	----

第二節 よくない効果と犠牲	52
---------------	----

第三節 すぐれた言語技術	73
--------------	----

第三章 言語技術の重要性	75
--------------	----

第一節 言語生活と言語技術	75
---------------	----

第二節 言語技術と言語研究	80
---------------	----

各 論

第一章 話すとは？	86
-----------	----

第一節 話の成立条件	87
------------	----

第二節 話の性格	103
----------	-----

第三節 話の分類	110
----------	-----

第二章 話題の吟味	116
-----------	-----

第一節 話題の分類	116
-----------	-----

第二節 話題の選択	128
-----------	-----

第三章 文脈の構成	148
-----------	-----

第一節 話題相互の関係	148
-------------	-----

第二節 話題の配列	152
-----------	-----

第四章 表現の工夫（その一）	179
----------------	-----

——語句のえらびかた——

第一節 語句をえらぶ基準	180
--------------	-----

第二節 わかりやすい表現	184
--------------	-----

第三節	おもしろい表現	207
第四節	快い感じを与える表現	234
第五節	力強い表現	248
第五章	表現の工夫（その二）	257
	——音声表現のいろいろ等——	
第一節	装飾音声	259
第二節	表情音などの挿入	276
第三節	身ぶりの加えかた	282
第四節	ポーズの置きかた	287
第五節	声量とテンポの変化	293
結び		301
解説	平井昌夫	309
引用文献一覧		319

話しことばの技術

總 論

第一章 言語技術とは？

第一節 きまりと技術

近ごろ、〈言語技術〉ということが、さかんに言われる。やさしく言えば、〈コトバの技術〉だ。コトバについて〈技術〉というのは、どういうことだろう。

それは、コトバの〈きまり〉に対するものだ。〈きまり〉は、コトバが正しいか、正しくないかをきめる尺度となるものであり、それに対して、コトバの使いかたがじょうずかへたかというときに問題になるのが〈技術〉である。

よく

「あの人の話は、アクセントがじょうずでおもしろい」
などと言う人がある。――が、これは変だ。なぜか。

言語学や音声学で〈アクセント〉と呼んでいるのは、こういうものだ。

たとえば、東京のコトバで、「箸」という単語を発音するときは、ハを高くシを低く「ハ

シ」と言う。が、一方「橋」という単語は、ハを低く、シを高く「ハシ」と発音する。これは、東京という一つの言語社会で、習慣として一定していることである。つまりへきまりゝだ。このきまりに反して、「箸」というつもりで、ハを低くシを高く、

「ハシを持って来い！」

などと言ったら、どうなるだろう。

ムリ言うない。あんなデツカイものが持って来られるかい！

ということになる。「箸」をハシなんて言うのは月並だからおれはトップ・モードで「ハシ」でいくんだ、などとりきんでみても、はじまらぬ。へきまりゝに反したコトバは正しくない。コトバとされて、その言語社会の中では誤解されるか、笑われるかする。つまり通用しない。

要するに、アクセントというのは、

『言語社会の中の習慣として、一つ一つの語について定まっている、高低のきまり』¹²である。そのきまりによって、すべての語は、それぞれ一定の高低の型を持っており、その型も数もキチンと一定しているから、うまいアクセントの新発明を試みるというような余地は全然ない。

そういうきゆうくつなきまりからすると「あの人はアクセントが正しい」「正しくない」ということは言えても、「あの人はアクセントがじょうずだ」ということは言えないわけだ。